「洗礼者ヨハネの誕生予告」（ルカ一章一～二五節）

1　先駆者ヨハネ

今日は待降節（アドベント）、二番目の日曜日です。二本目の蝋燭に灯がともりました。今日も、救い主イエス・キリストが来られることを、私どもの思いの中心に置いて、礼拝をささげます。

「救い主イエス・キリストが来られる」と申しましたが、これには、すでに来られたという意味と、これから来られるという意味と、二つあることは、皆さん、ご承知の通りです。

この「すでに来られたイエス・キリスト」はまさに福音書に伝えられています。「伝えられている」というより「証しされている」と言うべきかも知れません。四つある福音書、これらはみな、弟子たちによって語られ、それが書き記されたものだからです。後に使徒と呼ばれる彼らは、イエスと生活を共にし、彼の言葉を聞き、その働きをつぶさに目撃し、その人となり・人格に直接接した。福音書は彼らの証し、証言以外の何ものでもないのです。

福音書ですから、ここには福音が書かれているわけです。福音とは、良い知らせです。先週私どもが聞いたイザヤ書四〇章（九節）にも、「良い知らせ」という言葉が二度使われていました。バビロンからの解放が近い、神が国を再興し、共にいて、歩んで下さる、それは捕囚の民にとってだけでなく、イスラエル自身にとって喜び、まさに福音でありました。

福音書には福音が書かれている。その通りです。しかしそこに書かれているのは実際はイエスです。イエス・キリストです。その言葉、その振る舞い、そのたたずまいを通して、イエスご自身が書き記されています。つまりイエスが福音を語ったとか何か良い知らせをもたらしたというのではないのです。それもあるけれど、それもイエスと別のものが提示されたというのではないのです。イエスが福音書の主題です。イエスその方が福音なのです。

とはいえ福音書はイエスを、生まれてから死ぬまで、いわば一つの伝記の形で書いているわけではありません。そこに書かれているのは、イエスがメシアとしての自覚をもって、神の国の宣教を開始してから、年齢で言うと、三〇歳から数年のあいだの出来事です。最後に十字架につけられて死んだ、しかしその三日後に復活した、そのイエスの歩みです。

ところでこの福音書の終わりはどうなっていたかと言うと、マタイ、マルコ、そしてルカによる福音書は、復活したイエスが弟子たちの目の前で天に挙げられる場面で終わっています。ヨハネによる福音書は、それとは少し違って、復活のイエスがペトロに現れ、「わが羊を養え」と語って、後の教会の働きをペトロに託すところで終わっています。

では福音書の最初はどうなっていたのでしょうか。四つすべての福音書、それぞれ描き方は少し違いますが、洗礼者（バプテスマの）ヨハネの出現、その活動を伝えるところから始まっています。

これに関連して思い起こすのは、使徒言行録に記されている、百人隊長コルネリウ

スの家でしたペトロの説教です。彼は、そこで、イエスに関わる出来事の全体を振り返って、こう言っています。

ヨハネが洗礼（バプテスマ）を宣べ伝えた後に、ガリラヤから始まってユダヤ全土に起きた出来事です。つまり、ナザレのイエスのことです（一〇・三七）。

なるほどイエスの出来事は、ヨハネが洗礼（バプテスマ）を宣べ伝えた「後に」起こったことです。しかしこの「後に」というのは、「それと無関係に」という意味ではありません。そうではなくて、むしろ「それにつづいて」という意味です。それに必然的につづいてイエスの宣教が開始された。こうして洗礼者ヨハネは神の救いの歴史の中に位置づけられています。洗礼者ヨハネはイエスに先駆し、その道備えをなした人です。

2　ザカリアの不信仰

四つの福音書とも、何らかの形で洗礼者ヨハネについて語るところから始めていると申しました。

それには違いないのですが、もう少し詳しく言えば、ルカによる福音書は、他に比べて独特です。

他の福音書がみな、ヨハネが活動を開始した、したがって年齢的にもイエスと同じぐらい、三十歳近くになってからのヨハネのことを書いているのですが〔例えば最も重要なものの一つとして、このヨハネからイエスが洗礼（バプテスマ）を受けたというようなことですが〕、ルカによる福音書は、まさに今日の私どもの聖書がそうであるように、彼がヨルダンの低地、荒れ野で活動を開始する以前、いや生まれる前のことを書いているのです。そこから書き起こしているのは、ヨハネが、神の救いの歴史に、イエスの出来事に深く関わっているということです。ヨハネも神の救いの目的のために選ばれ、召された人なのです。

洗礼者（バプテスマの）ヨハネ、この名を聞いて、私どもが最初に思い浮かべるのは、その生活ぶりです。住んでいたのは荒れ野です。要するに人の住まないところです。聖書には、らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べていたとあります。彼がしていたのは、来る人来る人に悔い改めを迫り、その悔い改めのしるしとして洗礼を授けていたのです。その強いメッセージに引かれてきたユダヤ人はユダヤ全土に及び、その中には、徴税人や兵士もいたし、中にファリサイ人やサドカイ人もいたとあります。たださすがに彼らは「蝮（まむし）子らよ」言って追い返されています。

こうした成人してからの洗礼者ヨハネのことと、今日の箇所が私どもに示しているように、彼が敬虔な祭司を父に持ち、母もまた由緒ある祭司の家系の出であったということと、並べてみると、半分驚くと共に、半分は少し納得、というような思いにもなります。

今日の箇所で、洗礼者ヨハネ自身については、天使のお告げの中で、その一端が予告という形で語られているにすぎません。話の中心は、ヨハネの父と母です。ザカリ

アとエリサベトです。

二人とも神の前に正しい人で、主の掟と定めをすべて守り、非の打ちどころがなかった。しかしエリサベトは不妊の女だったので、彼らには子供がなく、二人ともすでに年をとっていた（七節）。

これを読むと私どもは、先月まで学んでいた創世記、アブラハムとその妻サラのことを思い起こします。

しかし旧約には、そうした中で、奇跡と言ってもいい、神の特別の働きによって子を産むことになった人が多く出てきます。イサクの妻リベカ、ヤコブの妻ラケル、時代はくだってエルカナの妻ハンナも同じです。このハンナの子が先見者（預言者）サムエルです（サムエル上一章）。

こうした系列を思い起こせば、洗礼者ヨハネの誕生から始まり、イエスの宣教へとつづく救いの歴史は、人間の営みの、人間の、世直しの思いの延長線上に起こったのではなくて、神の救いのわざとして、まさに上から開始されたのです。神の働きがすでにここで始まっています。

今日の箇所が示しているように、ヨハネの父祭司ザカリアが、「主の聖所に入って香をたく」という務めを果たしているとき、突然主の天使が現れて、妻エリサベトは男の子を産むと告げられます。

天使の言葉を聞いたザカリアは、最初恐怖の念に襲われます。少し落ち着いた彼は天使に問うのです。「わたしは老人ですし、妻も年をとっています」（一八節）。ここまでは事実ですが、言外にそんなことはあろうはずはありませんという思いが聞こえます。「何によって、わたしはそれを知ることができるのでしょうか」と問うのです。ザカリアは、確証となるしるしを求めます。

創世記でアブラハムの生涯を辿ったとき、これと同じ言葉をアブラハムもサラも何度も口にしたことを思い出します。しかし彼らがその不信仰を問われるというようなことはありませんでした。しかしここでは、ザカリアは天使に「時が来れば実現する言葉を信じなかった」として、「口が利けなくなり」、話すことを奪われてしまうのです。どこに違いがあったのか、直ぐには分かりません。しかし根本のところで、ここではアーメン（しかり）と言って神の約束を受け入れることが期待されていたのだと思います。神の言葉をそのまま受け入れ、賛美すべき時が、私どもにはあるのだと受けとめておきたいと思います（カルヴァン）。

3　証人としてのヨハネ

ザカリアは、お告げを聞き、不信仰な反応をみせましたが、妻エリサベトは、そうではなかったようです。

というよりも、夫ザカリアが口が利けなかったので、自分が男の子を産むことになることを知らなかった可能性があります。

ですから身ごもったことは、彼女にとって思いがけないことだったでしょう。その驚きと喜びが今日の箇所の最後の彼女の言葉に表れています。確かに神は彼女に「目

を留め」（二五節）てくださった。この驚きと喜びはイエスの降誕に、そして私どものクリスマスにつづくものです。

天使のお告げの中で語られた洗礼者ヨハネについては、今日はほとんど触れることができませんでした。ただイエスとの関係を知るためにその一部に目をとめておきたいと思います。

イスラエルの多くの子らをその神である主のもとに立ち帰らせる。彼はエリヤの霊と力で主に先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する（一六～一七節）。

これは旧約のマラキ書を踏まえた預言です。分かりにくいところがありますが、一言で言えば、救い主、やがて到来するイエス・キリストに先だって、道備えをする人だということです。イエスを指し示す、イエス・キリストの証人、そこに彼の人生の意味があったのです。

今日は最後に、有名なイーゼンハイムの祭壇画、キリスト磔刑図によって、証人としての洗礼者ヨハネの姿を見てみたいと思います（スクリーン）。

描いたのはマティアス・グリューネヴァルト（1470/75-1528）というドイツ中世の画家です。この祭壇画は現在フランス、アルザス地方のコルマールという町にある（ウンターリンデン）美術館にありますが、もともとはその近くのイーゼンハイムにあった聖アントニウス修道院にあったものです。中世の修道院は病院をかねたところが多く、療養者の癒やしと慰め、信仰の励ましのために制作されたもののようです。三重の観音開きになっていて、一つ開けば、奥に降誕図や復活図などが描かれています。日によってまた季節によって画面が交替し、人々はそれを見ながら祈り、イエスに望みを託していたのです。縦約二～三メートル、横約五～六メートルの非常に大きなものです。

今日、私どもが注目したいのは、十字架の右下に立っている人です。これが洗礼者ヨハネです。とくに、長く大きく描かれた洗礼者ヨハネの右手、人差し指が印象的です。この人を見よ（ヨハネ一九・五）！　この指がヨハネの存在全体を象徴しています。指の後ろの暗い画面に描いてある文字は、ラテン語で「あの方は栄え、わたしは衰えなければならない」（ヨハネ三・三〇）です。これこそが証人というものの在り方にほかなりません。

興味深いのは、これは数年前宮田光雄先生の書物（『ルターはヒトラーの先駆者だったか』）で知ったのですが、右手の人差し指以外の指でヨハネは特殊な絵の具を挟んでいた、という説です。結論は出ていないらしいのですが、もしそうであれば、この洗礼者ヨハネの像は、グリューネヴァルトの自画像でもあった。画家は自分を描き込んだのです。

グリューネヴァルトは、自分はその画業をもってイエス・キリストを証しする、洗礼者ヨハネの指にすぎないという信仰の告白をもってこの祭壇画を制作したと言えると思います。教会も、そして私どもも、同じく、キリスト・イエスの証人として歩んでいきたいと思います。

（二〇二〇・一二・六）